

ヨハネの手紙第一4章4-6節 「神から出た者」

1A 偽預言者に対する勝利 4

1B 子どもたち

2B 内におられる方

2A この世の者 5

1B 世のこの話者

2B 世の人の傾聴

3A 私たちに聞く者 6

1B 神を知っている者

2B 真理の霊と偽りの霊

本文

ヨハネの手紙第一 4章を開いてください。私たちの学びは、前回、4章 1-3節でした。今晚は、4-6節を見ていきます。「⁴ 子どもたち。あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。⁵ 彼らはこの世の者です。ですから、世のことを話し、世も彼らの言うことを聞きます。⁶ 私たちは神から出た者です。神を知っている者は私たちの言うことを聞き、神から出ていない者は私たちの言うことを聞きません。それによって私たちは、真理の霊と偽りの霊を見分けます。」ヨハネが、私たちが神から出た者として励ましています。それで今晚の学びのテーマは、「神から出た者」です。

1A 偽預言者に対する勝利 4

今日の箇所は、前回の学びの続きになります。反キリストの霊があって、それはイエス・キリストが肉を持ってこられたことを告白しないということでした。そして、そういうことをいう偽預言者が今は、大勢出てきている、と言っています。

当時のことを私たちは、時々間違えてしまいます。今でこそ、何百年もかけて、キリスト教会の指導者たちが数々の公会議を経て、正統な教理というものを確立していますが、当時は、おそらく、使徒ヨハネが活着している時でさえ、グノーシス主義などの偽りの教えはかなり広がっていたと考えられます。もしかしたら、使徒たちの教えではなく、異端のほうに勢いを持っていたかもしれません。そのような中で、自分たちは、キリストが肉を持ってこられたという使徒たちの証言が、もはや敗北してしまうのではないかと？違った教えのほうに、今後、残されるのではないかと？という懸念もあったかもしれません。そういった時に、ヨハネが「**彼らに勝ちました**」と励ましたのです。

本物と偽物のどちらが広がるか、受け入れられるか？と言いますと、偽物のほうです。エレミヤ

の時代に、バビロンによってエルサレムが滅ぼされると預言したのは、彼とほんとうに僅かな預言者だけでした。けれども、預言者は数多くいたのです。つまり、偽預言をする者たちが圧倒的だったのです。そして、パウロは、違った教えを教会に持ち込む者たちに対処していたテモテに、励ましを与えました。「Ⅱテモ 4:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。3 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、4 真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。」

イエス様は、いのちへの道と滅びへの道の二つを語られました。どちらが狭く、どちらが広いでしょうか？いのちの道が狭く、滅びの道が広いのです。「マタ 7:13-14 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。14 いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。」そしてこの後に、7章 15節にそのまま、偽預言者が出て来ることを警告しておられるのです。「偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」つまり、偽預言者が、それらの滅びへの広い道に誘い込むということがあるのです。彼らは、実によってみわけなさい、とイエス様は言われます。そして、主が戻って来られた時に、「多くの者」が、主よ、主よ、と呼び求めます。けれども、「わたしはおまえたちを全く知らない。」とイエス様は言われるのです。

私たちは、偽預言者というと、偽りのことを神の名によって語る人々という印象を持っています。それは正しいです。けれども、多くの偽預言者は、部分的には正しいことをたくさん話すのです。いや、ほとんど正しいことを話していることさえあります。けれども、肝心のところが抜けている。あるいは、その言っていることにかなう行ないが伴っていません。例えば、私が長いこと、取り組まなければいけなかった問題は、教会のことを語っているのに、教会として集っていない人々のことです。そのために、教えていることは特段に間違ったことを言っていないのに、教会全体に分裂や荒らしという問題を引き起こしています。言っていることは正しいので、その偽りを見抜くのが難しいのです。イエス様は、「実によって判断しなさい」と言われたのはそのためです。

そして、当時のグノーシス主義者らは、「知識」をもって信者たちに迫ります。圧倒的に、いわゆる知識においては、彼らのほうが優れていたのです。議論をしたら、敗けてしまいます。言葉においては優れていますから、言い争いは得意なのです。「Ⅰテモ 6:3-4 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。」

1B 子どもたち

しかしヨハネは、「**子どもたち**。」と言って励ましています。長老のヨハネにとって、自分の書いて

いる手紙を受け取っている人々の殆どが若く、そして信仰的にも若いです。だから、子どもたち、と呼びかけているのですが、それだけでなく、事実、彼らが神から生まれた、神の子どもたちという意味もあります。「3:1 私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。」それが、ここでは、「**あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。**」という言葉にヨハネは言い表しています。

イエス様は、黙示録で七つの教会に対して、全ての教会に、「勝利する者」への約束を与えておられます。エペソの教会に対して、「2:7b 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」スミルナの教会に対して、「2:11b 勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない。」ペルガモンの教会に対して、「2:17b 勝利を得る者には、わたしは隠されているマナを与える。また、白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。」ティアティラの教会に対して、「2:26b 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」サルディスの教会に対して、「3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」フィラデルフィアの教会に対して、「3:12 わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。」最後に、ラオディキアの教会に対して、「3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

いかがでしょうか、勝利を得るとなると、何か大会に出て勝利する一部の者だけが、エリート・クリスチャンだけがこれらの約束を得ると思ってしまうかもしれません。けれども、黙示録を書きしめたヨハネは、この手紙で「**神から出た者**」だから勝ちましたと言っています。

神から出た者であるので、神のものになっています。これこそが、どんなに敵が襲ってこようと全く敗けることのない理由であります。「ロマ 8:31 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」誰も敵対することはありません。パウロは、ここで「8:39 主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」としめくくっています。神に愛され、神のものとしてされているというところで、世に打ち勝っているのです。そして、キリストが肉体を取られてこられたという告白によって、勝っています。

2B 内におられる方

そして、「**あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。**」と言っています。神から出るということは、神によって生まれたということであり、神の御霊が私たちの内にお

られるということです。「3:24 神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。」そして、この方が、この世にいる者、つまり悪魔よりも偉大、力があるということです。いかに、悪魔の勢力が、反キリストの霊が猛威を振るっても、私たちのうちにおられる方は、なおのこと強いということです。

私たちは、悪魔が神に対抗し、反抗しているからといって、悪魔と神が拮抗していると考えてはいけません。しばしば、悪魔の力ばかりに注目して、あたかも神と悪魔とのタイトルマッチのように、霊の戦いを見なしている人々がいますが、違います。悪魔は、あくまでも墮落した天使です。神が天使をお造りになられたのであり、被造物と創造者という圧倒的な違いがあるのです。確かに、悪魔の力を過小評価してはいけません。イエス様は、「この世を支配する者(ヨハネ 14:30)」と言われました。パウロは、「この世の神(Ⅱコリ 4:4)」と言っています。そして、ヨハネ自身が、第一の手紙の中で、「5:19b 世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」と言っているのです。それにもかかわらず、ヨハネは、「5:18 悪い者は、その人(神から生まれた者)に触れることができないことを、私たちは知っています。」と言っているのです。それは、御霊によって、神ご自身が私たちの内におられるからです。

悪魔は、神に反抗しており、今、世を支配していますが、しかし、あくまでも神の主権の下でしか動くことができません。ここが私たちには理解するのが難しいのですが、神に対抗しながら、悪魔は、神の許しの中でのしか動くことができず、究極的には神のしもべであるということです。そのことが良く分かるのが、ヨブ記 1-2 章です。神のところに、神の子たち、すなわち天使たちが集まってきましたが、その中にサタンもいました。そして、ヨブに対して、彼の財産に手を出すように願い出ます。神は許されますが、「1:12 ただし、彼自身には手を伸ばしてはならない。」と言いつけます。それでも、サタンが予測していたように、ヨブは神を呪うことはしませんでした。それで、「2:5 彼の骨と皮を打つてみてください。」と言います、けれども神は、「2:6 ただ、彼のいのちには触れるな。」と言われます。サタンは、神のヨブへの愛と憐れみに挑みかかったのです。けれども、神の許しなしに、すべてのことを行うことができませんでした。

黙示録には、神に仕える御使いの姿が数多く出てきますが、墮落した天使、すなわち悪魔や悪霊どもの活動も多く書かれています。その悪魔や悪霊どもであっても、例えば、底知れぬ所で鎖につながれている悪魔は、千年の間、鎖につながれているので何もすることができませんでした。千年が経って、鎖をようやく解かれたのです。神の力と主権の中でのしか動くことができないのです。

そして、神が悪魔の活動をお許しになるということには、さらに深いお心があります。その最も大きなことは、「愛」です。神がご自分の造られた者たちを愛しておられる。慈しんでおられる。なので、その愛の関係を土台にしているので、悪魔が誘惑をしたり、攻撃をする時に、その関係が強めら

れることを願っています。ヨブのことを再び思い出せば、神はヨブがご自身を恐れていることを良く知っておられました。たとえ悪魔に試みられても、忍耐することを知っておられました。それで、彼は最後に、癒されて、財産のすべてが二倍になって返されましたが、それ以上に、彼自身が神ご自身を見るということにあずかり、その関係が強められたのです。

ですから、この世を支配する者の力は強いのですが、「**あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。**」とあるとおり、その者にも勝利しているのです。しばしば、悪霊追い出しをする習慣が、キリスト教会にもあります。悪霊追い出しは、主ご自身が行われたことで使徒たちも行ったことであり、今も、数多くの悪霊の現れを見ます。私たちの日常生活では少ないですが、世界宣教の現場に行けば、無数に悪霊との遭遇の証言が出てきます。ですから、必要なのですが、しかし、何でもかんでも悪霊追い出しにしてしまう悪い習慣があります。説教中に居眠りをしたら、「眠りの霊があなたの内に入っている！」と言って、眠りの霊を追い出すことさえあるのです。私たちキリスト者は、悪霊に取りつかれることはありません。なぜなら、内に神の御霊が住んでおられるからです。悪霊どもの攻撃は受けますが、それは熾烈なものですが、私たちを乗っ取ることは、内にキリストがおらえるかぎりあり得ないのです。

2A この世の者 5

⁵ 彼らはこの世の者です。ですから、世のことを話し、世も彼らの言うことを聞きます。

ここの「彼ら」とは、偽預言者のことです。反キリストの霊によって預言している者たち、教えている者たちのことです。彼らは、初めは使徒の教えを守る教会に連なっていましたが、途中から分離して、離れていきました。しかも、尤もらしく見える知識を携えて離れていきました。ヨハネははっきりと、彼らが「**この世の者です**」と言っています。先には、2章 19節で、「**出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。**」とあります。

ヨハネは、ずっとこれら偽預言者の言動をこの手紙で暴いていますが、それらは共通して、「世においては当たり前のように行われている」というものでした。いくら神を知っているといっても、罪を犯してもよいとしています。だから、「**3:8 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。**」と明確に言いました。世であれば、罪を犯すのは当たり前です。彼らが肉体において何をやってもよいとして、霊のことで肉のことを分けていたのは、彼らが実は世に属していて、世の支配者、悪魔から出ているからだ、ということなのです。兄弟を憎むのもそうです。自分たちが兄弟から離れていくのを是としていました。世が、キリストのものとなっている者たちを憎むのは当たり前です。「**2:13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。**」と言いました。それで、この者たちは兄弟たちから離れるということで、憎しみを表しました。つまり、彼らは神からではなく、この世の者だったということが明らかにされたのです。

1B 世のこの話者

「ですから、世のことを話し」と言っています。いくら、神のことを語っている、イエスのことを語っているとしても、結局は、世の話をしているにしか過ぎないということです。

教会についてのことは、「似て非なるもの」が多いです。世にあるものに似ているのですが、全く性質が異なるもの、神からのもの、聖なるものが多いです。それは、イエス様のご性質から来ます。イエス様は、決して社会や生活からかけ離れた方ではありませんでした。イエス様の話されたことは、その喩えは、生活に密着したものでした。種蒔きのこと、また不正の裁判官など、裁判沙汰について。不正の管理人については、債務についてのこと。投資や利子についてのこと。王子の祝宴のこと。戦争のこと、人が死んだ事件のことなど、本当にあらゆる分野に及びます。これらに関わっているのは、汚れに関わることなのだとするのは、それこそ霊と肉の二元論になりかねません。イエス様が肉体を取られたのは、そういったことに関わり、私たちの間に住まれ、一体となられるためです。

けれども、関わっておられるのは、世と一つになるためではなく、世から私たちが贖われ、聖なる者とされるためです。主ご自身が、御父の中に留まっておられたことによって、そのいのちが信じる者にも分け与えられます。ですから、その本質は世にあるものと相いれませんが、「Ⅱコリ 6:14 不信者と、釣り合わないくびきをともしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。」

ですから、似て非なるものです。例えば、私たちには交わりが必要です。でも、もしそこで、教会の他の人のことの悪口会になっていたらどうでしょうか？ある人は、そこで「サタンとの交わり会」と呼びましたね！交わりという言葉も、世のものになり得るのです。献金は簡単ですね、主に対する礼拝行為そのもので、聖なる行為ですが、それを指導者の貪る手段にすることさえできますし、事実、使徒たちの手紙には、敬虔を貪欲の手段にしている偽教師の存在が警告されています。指導者には従うのですが、会社で上司に従うのとは違います。牧師ではなく、教会に神によって召され、神に従うのです。聖書の学びはするのですが、知識を得る講習会とも違います。神の真理を知って、キリストと交わるのです。祈り、または助けによって病や弱さを助ける働きはしますが、それは立ち返るためであり、福祉サービスとは違います。

カルバリーのある牧師さんが、いつも興味深いツイートを流しています。「反対者がいるからこそさらによいものができていく 民主主義。反対者は排除する カルト。反対者はいることができないキリストの体」¹キリストのうちには美しい一致があり、互いに敬うことができますから、反対者はいることはできません。けれども、世がそれを見るならば、「カルトに違いない」と思うのです。そして、キリスト者と呼ばれている人でさえ、カルトと変わらないとして批判して、だから教会には属さない

¹ <https://twitter.com/Santou/status/1182253671091863552>

という人たちもいますが、それは偽りです。また、一致の名のもとに、反対者を排除しようとする働きもあります。これは、イスカリオテのユダさえ最後の最後まで受け入れ、悔い改めを迫ったイエス様の心と完全に離れています。キリストの御体は、いろいろな器官があり、いろいろな賜物、いろいろな働きがあります。

ですから、いかようにでも、神の真理のように見えて、実は世の話しかしていないということがありうるのです。そして、偽教師はそうしたことを最大限利用して、世のことを、霊的なこと、神のことのものとして伝えることができるのです。

2B 世の人の傾聴

そして、「**世も彼らの言うことを聞きます**」とっていますね。そうです、彼らの言うことを聞き入れているのは、それはその聞いている人々たちも世に属しているから聞いているのです。世のことを話しているのですから、多くの人々が信じてしまうということは当然でもあります。

イエス様の肉の弟たちが、イエス様に、「ヨハ 7:4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うなら、自分を世に示しなさい。」と言いました。イエス様は、「ヨハ 7:7 世はあなたがたを憎むことはできないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証しているからです。」と言われました。ここで思い出すのは、父親がまだ信仰を持っていない頃のことです。彼は経営者だったのですが、経営者たちの集まりに、ある教会の牧師さんが講演で話しているビデオを見せてくれました。「清正も、こういうようにならないと。」と言いました。その言葉には、「小さなところで、ちまちまやっけていしょうがない。」という意味合いがあったかもしれません。その牧師さんのしていることが、間違っているということではありませんが、罪も十字架も何もない話でした。けれども、はっきりと罪も十字架も語り、また応答して、キリストに従う者として互いに集まるということまで話せば、一気に人は少なくなるのです。

この場合、はっきりと経営者の方々に語っているということがありますから、彼が偽預言者とかそういうことではないですが、しかし教会において、これは神からのものであるという装いをして、罪も十字架もない、つまりキリストが肉体を取って来られたという目的を語らないメッセージをしていたら、それは世の人は聞くものになり、多くの人々が集まるのかもしれませんが、教会が世のものになってしまうのです。

他に、伝道をしていて実感することは、「何かを頑張ることによって、救いを達成する」ということを語ると、おそらく人々は多く集まって来るだろう、人は聞く耳を持つだろうということです。神の恵みを話すと、人々の多くはつまづきます。「なんだ、何の努力もなくしてしまうではないか。それでは向上につながらない。」とあしらうのですが、別の言い方をすると、「どんな努力をしても、救われ

ることはできません。」と言っているのです。だから、全くとらえどころがなくなるし、あるいは、自分がそんな無力な人間ではない！と反発されるわけです。恵みは、自分たちの努力ではどうしようもない、とらえどころのない世界ですから、だからキリストのところに来るのが困難になるのです。けれども、救いをもしノルマ制にしたら、人は多く来るでしょう。それによって世の人がたくさん聞いてくれると思います。

ですから、ここから分かるのは、「福音を世に合わせる」ことの徒労です。神からではなく、世から出ている者でなければ、世に聞いてもらえないのですから。世に関わるな、ということではありません、イエス様こそが世を愛され、世に届いた方です。しかし、合わせることは到底、不可能です。主は世に憎まれて、それで十字架に付けられました。

3A 私たちに聞く者 6

6 私たちは神から出た者です。神を知っている者は私たちの言うことを聞き、神から出ていない者は私たちの言うことを聞きません。それによって私たちは、真理の霊と偽りの霊を見分けます。

ヨハネは、偽預言者、反キリストの霊によって語っている者たちと、読んでいる信者とを対比させています。ヨハネはおそらく、この手紙を真心から読む人たちは、既に神から出た者だという確信があるんでしょうね。偽預言者たちは、読むことさえしないことを知っていたのかもしれませんが。今、この言葉を聞いているみなさんの大半が、この「**私たちは神から出た者です。**」という方なのだと思います。なぜなら、すでにヨハネの使信を聞いているからです。

1B 神を知っている者

「**神を知っている者は私たちの言うことを聞き、神から出ていない者は私たちの言うことを聞きません。**」と大胆に言っています。私たちの言っていることを聞いてくれるのは、神をその人が知っているからだという大胆なことを話しています。ここから分かることは、私たちが聞いてもらえるというのは、私たちの言葉の雄弁さや説得力によるのではない、ということです。ひとえに関係によるものです。つまり、イエス様のものになっているかどうか？であります。神から出ているということ、イエス様につながっているということが、その語る言葉を聞いてくれるかどうかが決まってきます。神を知っている人であれば、聞いてくれるのです。

イエス様は何度となく、ユダヤ人指導者にも、弟子たちにもこのことを語られました。ユダヤ人たちが、イエス様の言われることを聞かないことについて、「ヨハ 8:19b あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」と言われました。そして、弟子たちは自分たちが憎まれるのではなく、彼らが聖め別たれて、イエス様のものになっているから、憎まれることを話されました。「15:21 しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。」

神を知らないから迫害をし、神を知っているから弟子たちの言うことを聞きます。

神から出ているから、同じく神を知っている人が、そのことばを聞きます。神を知らないから、神から出た人々の話は聞きません。こういった、いのちの連鎖による、言葉の伝達なのだという事です。これは、たくさんみことばを取り次ぐ私には慰めです。自分のしなければいけないことは、相手への説得ではなく、ただ神から与えられたものを語ることなのだ、ということです。自分に与えられているイエス様の言葉は、「ヨハ 15:5 わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」であります。人が聞き入れるのは、もっぱらイエス様によること。聞き入れないのも、その人がイエス様を知らないからだ、ということ。自分のできることは何もないのだ、ということです。

2B 真理の霊と偽りの霊

「それによって私たちは、真理の霊と偽りの霊を見分けます。」ということで、ヨハネは4章1節からの言葉をしめくくっています。「4:1 霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。」どうやって吟味、見分けを行うのか、これらのことによって行うのだ、ということでした。

どうやったら、見分けられるのか？だれのいうことを信用すればよいのか？ということに迷う時があるかもしれません。牧者チャック・スミスの言っていることが参考になります。「あなたが、私のいうことを信用してほしいとは思いません。イエス様を信用してください。私の書いた本を読んで真理を見つけるのではなく、聖書を読んで真理を見つけてください。聖書だけを読んで、あなたが信じることに私は何の疑いも抱きません。御霊が、みことばを読むあなたを真理に導かれます。」²ここですね、何が真理で何が偽りかを知る時に、ただイエス様に頼る、みことばに頼る、そうすれば聖霊が導いてくださるというところに立つ必要があります。

何か違った教えを言い始める時は、絶対に、次のことをしています。「神ではなく、だれか自分自身のところに引き寄せたいだれか他の人の言っていることを聞いた。」ということです。聖書だけを読んだら、そんな結論に至るわけがないのに、そうなるということは、どこかで誰かが言っているのを吹き込んでいるのです。パウロがガラテヤ人にこう言いました。「5:8 そのような説得は、あなたがたを召された方から出たものではありません。」誰かから吹き込まれたものであり、それが、パン種のようにしてわずかに吹き込まれただけなのに、全体に広がって、悪い実として結ばれていくのです。

² https://www.blueletterbible.org/Comm/smith_chuck/SermonNotes_1Jo/1Jo_41.cfm